京都大学	博士（人間健康科学）	氏　名	近田　藍
論文題目	A descriptive analysis of end-of-life discussions for high-grade glioma patients （悪性神経膠腫患者の End of Life Discussion に関する記述的研究）		

（論文内容の要旨）

背景

悪性神経膠腫（High grade glioma, HGG）患者は，他の癌種と比較し，高次脳機能障害等により，早期から意思決定能力が低下する。このため，HGG 患者の価値観を尊重しながら，残された日々に何を望みどの様な願いがあるかを家族や医療者と対話する，End-of-Life Discussion（EOLD）が重要である。HGG 患者の EOLD の実態とその効果は十分に検討されておらず，ガイドライン等においても具体的支援策は提示されていない。終末期にある HGG 患者本人を対象とした調査は，身体・認知機能の著しい低下により機能的・倫理的観点から許容されない。以上より，本研究では，遺族調査により，HGG 患者の EOLD 参加状況，EOLD の内容，タイミングとその適切性，および EOLD の患者への影響を明らかにした。

方法

京都大学医学部附属病院脳神経外科において，2007 年 10 月～2019 年 2 月までに HGG と診断された患者 344 名から死亡者 189 名を同定し，適格基準に従い対象遺族を選定した。2019 年 7～8 月に遺族 105 名へ郵送による質問紙調査を実施し，回答に不備等があった 30 名に電話での追加調査を行った。調査内容は，病期毎の HGG 患者の EOLD の参加の有無，意思判断能力の有無，話し合った内容，参加した医療者，EOLD のタイミングとその適切性，患者アウトカム（希望死亡場所の一致，家族への希望の表明の有無，Quality of EOL care，Good death）を尋ねた。EOLD への患者の参加と転帰との関連の評価に，フィッシャーの正確検定とウィルコクソン順位和検定を用いた。

結果

77 名より返答があり（返答率 73%），不参加の意向を表明した 20 名を除く 57 名の質問紙への回答を分析した（有効回答率 54%）。

EOLD 参加状況については，HGG 患者 31 名（54%）が全病期中 1 回以上 EOLD に参加していた。また，再発前で意思決定能力があるにもかかわらず 6 割以上の患者は EOLD に参加せず，家族だけで参加していた。参加形態別では，患者のみでの EOLD 参加はなく，家族のみで参加した割合（47%，n=27）が最も高く，患者が参加する場合は必ず家族も参加していた。家族のみで参加した理由として，26%の遺族は「患者が詳細な病状を知ることに抵抗があった」と回答した。

EOLD の内容については，患者の意向や目標を含めた対話は全 EOLD のうち 28%と少なく，脳神経外科医単独で EOLD が提供されていた(96%)。

EOLD のタイミングについては，患者参加群では診断後早期に参加した割合が最も高く，このタイミングについて 80%以上が適切であると回答した。加えて，意思決定能力保持者は再発後には半減しその後著しく減少しており，意思決定能力が保持されている診断後早期からの EOLD の開始が適切であることが明らかになった。

患者の参加と転帰との関連については，患者が EOLD に参加した群の方が，家族へ自身の希望や目標を表明することが有意に多かった（48% vs 8%，P=0.001）が，患者の EOLD 参加と，Quality of EOL care や Good death との関連は認めなかった。

結論

本研究では，半数以上の患者が EOLD に参加していたが，必ず家族が一緒に参加しており，患者の EOLD への参加には家族の意向が影響することが示唆され，自律性が脅かされる HGG 患者の EOLD の特徴が明らかになった。また，EOLD のタイミングは，診断後早期の開始が適切であり，HGG 患者自身が EOLD に参加することで，家族や医療者に自分の希望や目標を伝える機会を得る可能性が示された。しかし，患者の意向や目標を含めた EOLD は 28%のみで，多くの EOLD が脳神経外科医単独で実施されたため，本人や家族，主治医や看護師等の関係者が患者の価値観を最後まで尊重するために対話するという，EOLD の本来あるべき形態を満たしていなかった可能性がある。

（論文審査の結果の要旨）

悪性神経膠腫（High grade glioma，HGG）患者は早期から意思決定能力が低下するため End-of-Life Discussion (EOLD)が重要であるが，その実態と効果は十分に検討されていない。本論文は急性期病院における EOLD への HGG 患者の参加状況，EOLD の内容，タイミングとその適切性，EOLD の患者への影響について，遺族対象の調査により明らかにした。

解析対象は 57 名（回答率 54%）であった。54%の患者が 1 回以上 EOLD に参加しており，その内 58%が診断後早期から EOLD に参加し，内 83%の遺族がその参加のタイミングを適切であったと回答した。また患者参加群の方が患者の意向を家族へ伝達することが多かった。よって，患者と家族は早期からの EOLD を許容しうることが明らかになり，EOLD の患者参加は自分の意向を伝える機会となることが示唆された。

一方，過半数の患者は再発前に意思決定能力を保持しているが家族のみで参加しており，患者の主体的参加が妨げられている現状が明らかになった。また脳神経外科医がほとんどの EOLD を提供し，看護師は 3 割程度の参加で，患者の目標等を含めた対話は患者が参加した EOLD の内 28%のみであった。さらに EOLD の患者参加と，終末期ケアの質・望ましい死に有意差はなかった。本人や家族，主治医や看護師等の関係者が患者の価値観を尊重するために対話するという，EOLD の望ましい形態でなかった可能性がある。

以上の研究は，HGG 患者の EOLD の最適なタイミングの解明に貢献し，患者の QOL 向上に寄与する意思決定支援の発展に寄与するところが大きい。したがって、本論文は博士（人間健康科学）の学位論文として価値あるものと認める。なお、本学位授与申請者は、2021 年 3 月 31 日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日　以降